

H28. 2. 2

Dr. 和の町医者日記



「認知症の基礎知識」シリーズ⑦

「先生。ここだけの話ですが、嫁が財布を取るのです」

診察室に入ってくるなり、真顔でこうささやく高齢女性がいたなら、それだけで「認知症かなあ」と疑ってしまいます。嫁がヘルパーさんであったり、財布が宝石であったりもしますが、そういった訴えを「もの取られ妄想」と呼び、たいていは女性です。

1人で来院される場合もあれば、家族に付き添われて来られることもあります。『泥棒』にされたお嫁さんは、たいてい後ろで泣いていますし、息子さんは被害妄想だと分かっています、どちらの味方につくべきかとオロオロしています。

私は「それは大変でしたね。注意しときますね」なんて言いながら、盗難を主張するご婦人の肩を持ち、話題を全く別の方



長尾和宏 (ながお・かずひろ) 東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る。総合診療を目指す。医学博士。近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」はいずれもベストセラー。関西国際大学、東京医科大学客員教授。57歳。

向に変えます。5分も話しているうちに、さっきまで盗難被害を訴えていたこと自体、忘れていくことに気がきます。最初渋い顔をしていたご婦人も、そのころには笑顔で自慢話に花を咲かせています。

「嫁が財布を取った」というご婦人が3人連続で入ってこられて、面くらったこともありました。それほど、診察室で被害妄想の話を長々と聞かされる機会が増えていきます。そもそもこうした被害妄想はどこから来るのでしょうか。

ある介護の達人から「それは関係性の逆襲だよ」と教えられました。最初は「関係性」の意味がさっぱり分かりませんでした。達人いわく「認知症は医療の世界では脳の病気なんだろうけど、介護の世界では関係性の障害と呼ばれている」とのこと。その関係性は、夫婦関係などの人と人との関係のことだそうです。

人の世にある関係性の多くには、上下関係が伴います。たとえ家族や友人関係であっても微妙な上下関係が存在します。もし、認知症の義母と嫁の間に知らず知らずの間に上下関係が生じたとき、下になった側の心のどこかに必ず悔しい気持ちやわき起り、可能なら逆転したいという感情が生じます。多くの人は相手より上に立ちたいもの。それは人間の本能であり、性なのかもしれません。

被害妄想 実際に被害を受けていないにも関わらず、自分が「被害を受けている」と思い込んだり、被害を受けて決定的な証拠もないのに、犯人を決めつけてしまうような状態。病気の症状である場合と、精神的な不安定さからくる場合の2種類がある。

嫁が財布を取る？

する人とお世話される人の間には、知らぬ間にどうしても上下関係が生じがちです。そして、お世話される側が「ありがとうございます」を何度も言っているうちに、マグマのようなパワ―が蓄積されます。いつか上下関係を逆転させて、自分も「ありがとう」と言われたという願望です。

固定した上下関係を逆転させる方法は意外と簡単。自分が被害者になることです。被害者になるためには「物を取られた」と主張することが最も容易な方法です。それが真実かどうかなど、もはやどうでもいいのです。嘘でもいいから、自分が被害者になることで関係性を一挙に逆転したい。被害者になれば、立場が上になれるからです。

これはなにも認知症に限ったことではなく、報道を見渡しているとも、世間一般で起きる人間関係のトラブルで同様の現象がよく見られます。被害妄想の正体は、関係性の逆襲であることが多いのです。

ですから、その高齢のご婦人に薬を処方することが正しい解決法とはいえません。そうではなく、お嫁さんの関わり方を変えることが正解なのです。そして、その「嫁」とは時に医者であったり、看護師であったり、介護士であったり、ケアマネジャーであったりします。詳しくは「家族よ、ボケと闘つな!」(ブックマン社)を参照ください。

関係性の逆襲